

赤尾保志 対談シリーズ

あつた

9

【ゲスト】榎谷多紀子 ますたに・たきこ

【ホスト】赤尾保志 あかお やすし

【司会】草柳隆三 くさやなぎ・りゅうぞう

まえがき

医療と宗教そして心（有限と無限のいのち）との交わりを題目に置き、各界でご活躍の方々との対談は心踊らされるものがあります。

医療では、時間が経過するなかで、経験的法則に基づき裏打ちされた技術が、活用利用されています。肉体に対し侵襲性の強い作業が行なわれるのが医療行為であるためです。

宗教は、空間の中で常に現在形の言葉で多くの物事を言い表しています。BC千百三十年クレルモンの宗教会議において、修道院内での医療行為が禁止されました。心と肉体との問題を分離した画期的なできごとでした。

この三つの題目である心・医療・宗教を当距離で論じ合おうと言うことには、この本に目を落としていただける多くの方々の問題提起を試みたいという思いがあります。夫々の専門分野の方々はその領域を超えて考える一助になることを願っております。

今回の対談を始めるに当たり、お力をお借りしたの方々にはこの紙面を通じて感謝の意を表したいと思えます。

平成二十二年三月吉日

赤尾保志

赤尾保志 対談シリーズ

の
ま
も
り

9

【ゲスト】榎谷多紀子 ますたに たきこ

【ホスト】赤尾保志 あかお やすし

【司会】草柳隆三 くさやなぎ りゅうぞう

〈いのち〉を語る 第九回

聖マリアンナ会理事長、赤尾保志対談シリーズ、『いのちを語る』第九回。

今回のお相手は、シリーズ初の女性の登場です。

榎谷多紀子さん。兵庫県宝塚市で歯科医をしています。榎谷さんは、元タカラジェンヌ、歌劇団時代には、花園とよみという芸名で舞台上に立ち、「花組」のスターとして将来を囑望され、娘役として活躍していました。しかし、二十五歳で退団。女優を経て、三十六歳で歯科大学に入学。四十七歳になった時、宝塚で歯科クリニックを開業します。そして、さらにそれから十三年後、かつての恩師の、老いの悩みに直面した榎谷さんは、神戸大学大学院に入学し、歯科診療と並行して、精神神経科で、老いの研究に取り組むようになります。「宝塚」の華麗な舞台から一転して、「老い」の問題こそ、今の私の最大のライフワーク」という榎谷さんに、宝塚駅にほど近い、歌劇場の見えぬ先生の診察室でお話を伺いました。

*本文の中で、地域を表わす場合の表記は、宝塚、とし、宝塚音楽学校、あるいは宝塚歌劇団を表す場合は括弧をつけて「宝塚」という表記にしました。



司会（草柳） 最初、ここに入ってきた瞬間、「おや、ここは歯科医院？」と思つたほど、壁の色も明るいし、

花がいっぱい、とても診察室とは思えないような雰囲気の一部屋ですね。飾りやレイアウトなどは、梶谷先生のアイデアなんですか？

診療室から歌劇場が見えるのです

梶谷 そうです。歯医者に来るとみなさん、緊張されるので、できるだけアットホームな感じで、みな

さんとお話ししながら診療できたらと思つていたんです。患者さんには歌劇団の生徒さんたちも結構多くて、彼女たちから贈ってもらつた花なども飾つてあります。

患者さんとは、できるだけ、歯の治療だけじゃなくて、ご家族の話とか自分の悩みとかも、そういう話もお互いしながら、雰囲気や和らげるようにして、やつているんです。

司会 私たちは今、阪急宝塚駅、隣のビルの、八階にある梶谷さんのクリニックの診察室にいるんですが、ここからは梶谷さんが元いらした、宝塚の歌劇場が見えるんだそうですね。

梶谷 ええ、診察しながら見えるんです。私たちがいたころは、大劇場は三階まであったんですが、二階建ての劇場に建て替わった直後に阪神大震災に遭いました。被災の後は、ずいぶん長い間、休演していたんですよ。

司会 赤尾さん、宝塚にいらしたのは初めてですか？

赤尾 初めです。いいところですね。女の園というか、阪急線でここに来る途中には小林（おばやし）という駅がごきいますね。ここには小林の聖心女子学院という女学校がありますし、門戸厄神（もんどやくじん）駅の近くには神戸女学院があつたり、そういう意味では、華やかな場所という印象です。

榎谷 昔からこの界限は、女学校の多いところなんです。関西学院などもありますけどね。

司会 榎谷さんのご出身は、大阪だそうですが、宝塚音楽学校を卒業されて、その後の舞台での活躍を含めると、結局「宝塚」にいらしたのは、何年間ぐらいなんですか？

榎谷 音楽学校が二年、舞台が五年ですから、七年間、「宝塚」にいました。

司会 七年間というのは、「宝塚」の先輩の皆さんに比べると、どうなんですか？

榎谷 長くはないです。とくに舞台を五年で辞めるというのは、当時としては、短い方かも知れませんが、榎谷さん、今日のホストの、赤尾さんは、宝塚の舞台を、子供のころ見たことがあるんだそうですよ。

赤尾 小学生の頃、母親に連れられて東京の宝塚劇場に一度行ったことがあります。今は、新しい建物になりましたが、古い劇場の頃です。あの地域は、映画館があつたり、ある意味では、芸術の中心地の感がありました。

当時は春日野八千代さんがメインスターでいらつしやつたんじゃないかなつたでしょうか。出し物は「虞美人」だつたと思います。

榎谷 ああ、そうですか！

赤尾 戦後の、まだ荒廃していた中で、華やかというか、これからの日本を象徴するような、前向きな舞台を宝塚劇場で見させてもらいました。子供ながらにあの時の印象が残っています。すごいなあと思いました。

春日野八千代さんの相手役もつとめました

榎谷 そうだったんですか。

私、「宝塚」時代には、春日野先生の相手役もさせていただいたことがあるんですよ。春日野先生は、もうその時、大ベテランで、じかにお話をすることもできないような、存在だったんです。舞台に入って二年目に、植田紳爾先生という、前の歌劇団理事長をされていた方なんですけど、その先生のもとで、東京の大劇場でやらせていただきました。すごく、いい思い出です。

赤尾 昔ですから、うる覚えなんですけどもね、東京の宝塚劇場には、二階席があったような気がしません。二階の前の席で見ていた記憶があります。

榎谷 その時の、春日野先生の相手役はどなたでした？
南悠子さんではなかったでしょうか？

赤尾 かも知れませんが。

榎谷 その頃の上級生は、下級生の私にとって、日舞の稽古をつけていただくだけでも光栄というよう
な偉い方々でした。もう、神様みたいな人たちでした。ちよつと声をかけていただくだけでも、す
ごく光栄だったんです。「そこちよつと違うよ」、と少し手直しされただけで、ものすごく嬉しかっ
たですね。

司会 「宝塚」ってそういうところなんですか？

榎谷 上級生と下級生の区別がすっかりあって、音楽学校の二年間の間に、礼儀や作法、びつしり教え
込まれるんです。タテ社会なんです。

司会 軍隊みたいなんですね。

榎谷 女性の軍隊、つてよく言われました。

司会 赤尾さん、「宝塚」というのは、日本の芸能史というか、芸能の世界の中で、ある一定の役割を担っ
てきた、とても貴重な存在ですよね？

赤尾 世界広しと言えども、女性が男役をこなしながら劇をする、なおかつ長い歴史を持っているわけ
でしょ。

榎谷 もうすぐ百年になります。

赤尾 そこまで長く続けている劇団というのは、世界にはそうないんじゃないでしょうか。やはり、男
優は男性の役割、女優は女性の役割ということ、歌の世界でもそうですね。歌劇もそうですし……。
ところが「宝塚」だけは女性が男性の役回りもされるのですから、こうした劇団は、世界でも珍

しいんじゃないでしょうか。

悩んだ末の選択だったので

司会

しかも、榎谷さんは、その「宝塚」の中で、かなり将来を囑望されていて、回りからは、スターになることは間違いないだろうと思われていた。にもかかわらず、スパッと退団された、スパッとかどうかは分かりませんがね。

榎谷

悩んで、悩んで退団したんですよ。今は昔と違って、歌劇団も週一回のお休みがありますし、大劇場も休演なんです。今は、各々の組がお正月公演を担当するように振り分けられています。私は花組でしたのでお正月元日がいとも初日でした。それまでずっとお稽古と舞台で、暮れの三〇日が舞台稽古で、大晦日の三十一日だけが、たった一日、お休みだったんです。

本を読みたいとか、何か、こんなこともやってみたいとか思っても、休みがないわけですから、それも叶わないんです。少しでも自分の時間が欲しいと思えば、退団するしかないと思っただけです。精神的にも体力的にも、ぎりぎりまで頑張ったという思いがありましたので……。将来、大学で学びたいという選択のなかで、やはり「宝塚」の舞台に立ちたいと思っただけです。そして精一杯やりたい事をやらせて頂き、充実感もありました、精神的にも体力的にも、もうこれ以上走れないと思ひ、退団を決めました。

ただ、すごく悩みました。歌劇団からも怒られました、まだ三年は早いと。退団したいと言っても、なかなか受け入れてもらえなくて、毎日、母が当時の理事長先生のところをお願いに伺って、ようやく公演の千秋楽の直前にお許しが出て、ファンの皆さんにも舞台の上で退団のご挨拶をさせて頂くことができました。

司会 榎谷さんの、そういう思い入れというか、「宝塚」から一転して、全く別の世界に飛び込んだということもそうでしょうか、榎谷さんを次のステップに踏み切らせたものは何だったんでしょうか？

榎谷 母の影響も多分にあつたと思うんです。母からは、せっかく人間として生まれてきた命なんですから、精一杯生きなさいって、いつも教えられていました。

私はいつも道半ばでいたいと思っています。道半ばでいつか私も倒れていくと思います。その時、精一杯生きたいのです。

赤尾 強い信念をお持ちでいらっしやるから、羨ましいです。

司会 榎谷さんのお母さんは、人間として一生懸命生きなさいと言われた、ということなんです、ユニークな方だなど思ったのは、これは他で聞いた話なんです、たとえば、学校での勉強も、そんなに無理しなくてもいいんだよ、雨が降ったら学校に行かなくてもいいんだよ、と言っただけです。

母の躰はとってもユニークでした

榎谷

ほとんどです。私、赤ちゃんの時、身体が弱かったものですから、母にしてみれば、無事に大きくなってくればそれで良かったんですね。勉強は身体に悪いと言っんです。そして、日本舞踊を習わせてくれたんですが、それは身体にいいということで、運動代わりだったんですね。

学校に行っても、友達もなかなかできませんし、授業は全然分かりませんし、楽しくも何ともなかったですね。休みたければ休んでもいいよ、と言われて、家の中で一人で絵を描いていました。母から、一度も、学校に行きなさいよ、と言われたことはありませんでした。

司会

最近の大方の母親像とはずいぶん違うようですね。

榎谷 そうですねえ。勉強しなさいと言われたことはなかったですね、勉強するな、とは言われませんでした。……。

中学生になって、塾に通わせてほしいと頼んで、行くことは行っんですが、今度は、雨が降ったら休みなさい、風が吹いたら休みなさい、と言っんですからね。私は、母の手を振りほどいて、「行きたい」、「行かなくてもいい」と、もう、ほとんど親子喧嘩ですよ。

でも、そんな母でしたけれど、ほんとに嵐になった時など、私一人になって塾で勉強していると、心配して迎えに来てくれたこともありました。

司 会 榎谷さんが、勉強が好きになったというのは、逆に、そういうお母さんがいらしたからかもしれない

ませんね。その反動で、勉強が好きになった？

榎 谷 母はお琴が弾ければいいとか、日舞が踊れたらそれでいいと言うけど、学校に行ったら、勉強が

できなければ、友達もできないし、悔しい思いもする、それがお母さんには分からないのよ、と大喧嘩してました。

司 会 結局、宝塚音楽学校にお入りになって、大劇場で活躍され、そして今は歯科医として仕事をして

いらつしやるわけですが、世間普通の世界では、途中で会社を変える、仕事が変わるといことは、いくらでもありますよね。赤尾さんも、転職組でしたね。

赤 尾 私もサラリーマンから今の仕事へ移ってきたわけですから、転身しました。私の場合は、その時々

の状況の変化ということで変わってきたんです。

榎谷さんは、退団するかどうかでお悩みの時なども、たとえば、この近くに宝塚神社などもあり
ますけど、そういうところに行かれた、ということとはなかったんですか？

榎 谷 いいえ。

赤 尾 自分のことは自分で決める、という強い意志を持つてらつしやるんですね。

ところで、宝塚という、ここの土地柄というのは、面白いところだと思っんです。地名からして、
まず「宝」という文字がついてますでしょ。昔は、お正月には「宝船」などという絵を描いて、枕
の下に入れて寝るといい夢が見られるとか、悪い夢は見たくないから、「獺」の絵にするとか、と

いうことがありました。

この宝塚という地域の中で、私は外から見ていただけですが、ちょうど宝船のような、何かこう、華やかさがあるといえますか、宝塚に住んでいる方々のパッションというか情熱といえますか、そんなことを感じるんです。

実際住んでいらして、宝塚というところ、どんな風に感じていらっしやいますか？

宝塚の人たちに支えてもらったのです

榎谷

この地域は、ほんとに、のんびりしたところですよ。いい人ばかりが住んでいるというか、ほんとに穏やかでおっとりされていますね。最近は随分、都会化というかマンションラッシュで、多くの人たちが移り住んできていますが、私たちがまだ、歌劇団にいた頃は、この辺はもつと田舎だったんです。

とくに、歌劇団の生徒たちには、市場のおばちゃんたちも親切にしてくださいましたよ。歌劇団には全国から来ていて、親元を離れて、寮生活をしていると、ほんとに心細い思いをすることがあるんです。でも地域の人たちが私たちを支えてくださる、そんな雰囲気がありました。

赤尾

ちょうど、思春期に、親元を離れてくるわけですから、いろいろな悩みもあるでしょうし、そういう時には、みなさんと話をされたり、悩みを打ち明けたりとか、お互いに相談しあったりというこ

ともあったんですか？

榎谷 もちろん、それはありました。

私自身は、早く、主役をしたいというのが目標でしたので、たとえば、一緒にパンをかじりながら、仲良くレッスンに通っていた友達が、配役の発表になると、口をきいてくれなくなった時もありました。そういう思いを何度かしましたが、私はいつも、自分は「宝塚」に友達を作るために来たんじゃないと、自分自身に言い聞かせていました。

「宝塚」は下駄箱からロッカーまで、成績順の競争社会ですので、とにかく、早く主役をやりたいかったですね、その頃の気持ちとしては……。

赤尾 そういう時の心の中の葛藤というのは、みなさん、それぞれが持つていらしたんでしょうね。

榎谷 それはあつたでしょうねえ。でも、東京公演の寮生活などでは、夜遅くまで悩みを打ち明け合ったり、お互いに励まし合ったりした想い出がたくさんあります。退団してからは、もう、上級生も下級生もなく、優しくしてくださいまし、「宝塚」はほんとに、懐かしいふるさとだな、と思います。

司会 そして、榎谷さんの言葉をお借りすれば、紆余曲折あつて歯科医になられるんですが、退団後の仕事として、なぜお医者さんでなければならなかったんですか？

榎谷 精一杯だったから退団したんですけど、歯科医になる前に、私、テレビのお仕事をしていたんです。その時には、実はまだ自分の中では、方向は何も決まっていなかったんです。その時にテレビ局

から、声をかけていただいて、ドラマに出るようになったんです。

でも、テレビの世界はものすごく華やかで、楽しいところなんですけれど、男性の俳優さんとお芝居するのも初めてだったし、確かに、興味深い世界ではあったんですが、一生、芸能界で女優としてやっていくのかな、と思ったら、きつとそれはないだろうなと思ったんですね。

なぜかって言うと、この世界のお仕事は、自分がやってみたいと思っていたことと、ちよつと違うんじゃないかなと、思い始めていたんです、自分の中のどこかで……。

その時なんです、歌劇団を退団した後は、本当は大学に行きたいのだ、と思つたのは。

振り返って考えてみれば、いずれは高校を出て大学に進学するか、宝塚音楽学校を受験するか、一番悩んだのは十五歳の、中学三年生の時だったんです。

やつと勉強の楽しさが解つて来た時に、宝塚音楽学校を受けることに決め、高校の三年間は、普通の大学に入るための勉強ではなくて、音楽学校受験のための準備期間だったんですね。

人の役に立つ勉強がしたかったです

退団してからは、芸能界は自分の一生の仕事ではないと思ひ、今まで勉強らしい勉強をして来なかったものですから、お医者さんになろうというより先に、とにかく、大学に行きたいという気持ちがあつて、強くあつたんです。

そうして、大学で、何を勉強しようかと思ったときに、それまでやってきたことが音楽とか演劇とか、どちらかに分けられれば文系だったものですから、それなら、今までやってきたことのない理系に挑戦してみようと思ったんです。

で、出身の高校に相談に行きましたら、高校時代、私は、理系科目の単位をとってなかったんですね。理科、数学もⅠまでで、Ⅱ、Ⅲは選択してなかったし、先生は、理系の受験は無理でしょうと言われたんです。でも、やっぱり、行きたいなあ、と思う気持ちがあったんだん強くなって・・・歳も三十を過ぎていましたし、これまでの「宝塚」や女優の経験とつながりがあるって、人のお役にも立てるような、そんな勉強がしたいなと思ったんです。こんなことを言うのは恥ずかしいんですけどね。

歌劇団にいた頃から、気づいていたんですが、舞台人にとっては歯が命なんです。滑舌に問題があつて、台本のセリフがちゃんとと言えないとか、バレエでも、特にトーションでバランスをとって踊るときなど、大白歯の噛み合わせも大事なんです。とくに、「宝塚」では男役は女性を相手にするわけですから、歯を食いしばっていないければ、ダンスの時など、とても相手をリフトすることはできないんです。

ですから、歌劇団にいた頃から、口の中にはすぐく関心はありましたので、大学で歯科の勉強をしよう、と思いました。そして、できれば高齢者に喜んで頂けるお仕事をしたいという想いもありました。

司会 今、歯科医をしていらっしやるということは、「宝塚」とそういう意味でつながっていたということなんですか？

私の中では、**「転身」ではないのです**

榎谷 そうなんです、つながっているんです。ですから、私、よく「転身」、と言われることがあるんですが、ちよつとそれ、違うんです。私の中では、自分に興味のあることを辿って行っただけなんです。

司会 しかし、三〇歳になって改めて勉強し直して、しかも、医師になろうというのは、大変な覚悟ですよ？

赤尾 先ほど話していらっしやいましたが、人のためになることをしたいというお気持ちは、「宝塚」のときも、舞台上演することによって、人を楽しませる、ということだったでしょうから、その点では、歯科医になって人の役に立ちたい、ということと、気持ちの上では変わってはいない。

歯科医になったことも「宝塚」の延長線上にあったということなんですけど、仕事の中身は大きく変わりましたね。けれども、そのなかで、自分を大切にすることによって、人のためになるんじゃないか、という思い、自分を大切にすることとは、自己研鑽をして自己を磨きながら、もうひとつ別の能力を身につけていく、それを人のために生かしたい。そうしたお気持ちはずっと、

続いていたということなんでしようねえ。

ところで、歯科医になられて、もうだいぶ経ちますけど、診療されているときに、患者さんの顔を見てみると、いろいろな表情が見えてきますでしょうか？ 今、この人はどんなことを考えているのか、先生に、何か話しかけたいと思っっているんじゃないか、とか？

口の中の表情が読めるようになりました

榎谷 そうなんです。見えてくるんですよ、お顔の表情で。お口の中もそうなんです、その方の性格とか、生活習慣ももちろんなんです、患者さんのお人柄だとかも、だんだん解るようになりました。

赤尾 これも、口の中から人を見る材料の一つかもしれません、たとえば、私などは、食べ物をどこで噛んでいるかという、ほしい、右側なんです。こういう癖も、すつと分かっってしまうわけですよ？

榎谷 噛む力をチェックしますから、それはすぐ分かりますよ。

赤尾 噛み固める、という言葉があるんですが、昔は、お正月のお餅を、固くなったものを焼いて食べるんですが、一生懸命、噛まないで食べられないくらい固いですね。それは逆にそうやって食べることによって、歯を丈夫にし、健康を保てるということにつながるんじゃないかと思うんです。歯、

というのは直接、健康にかかわってくるんですね。

榘 谷

これはその後、「老い」ということに興味を持って、神戸大学の大学院に入って勉強しているうちに気付いたのですが、固いものをしっかりと咀嚼するということが、脳の機能にも影響するということが、あらためて、このことが良く解りましたね。そういう論文も多いんですけど、自分でやってみて、改めてそのことが良く解りました。

恩師の姿を見て私のライフワークが決まりました

赤 尾

歯科の診療をされながら、榘谷さんはさらに、高齢者の生き甲斐に関心を持たれて、その分野の研究で博士号を取られたんですが、それは、老齢になって、人生の最後の時間をどうするか、という課題に取り組んだということなんですね？

榘 谷

老年精神医学、というんですが、これは私のライフワークだと今は思っているんです。

これも、運命を感じるんですよ。最初は、ここの診療で精一杯だったものですから、大学院に行くことなどは考えてなかったんですが、結局、大学院に行くきっかけになったのは、こういうことだったんです。

実は、歯科医になるための国家試験に合格したときに、たまたま取り上げられた新聞の記事をご覧になった中学時代の担任の先生が、「おめでとう」というお手紙を下さったんです。私も、早く、

先生にお目にかからなければ、と思っているうちに、研修やら、開業準備やら、診療の忙しさやらで、ずっと、会えずじまいだったんです。

ようやく、その恩師に会いに行けたのは、平成十六年でした。お手紙をいただいてから、十三年経っていたんです。

無縁社会、無縁家族などと言われますが、先生にお会いした途端、すごいショックだったんです。都会のど真ん中で、こんなことがあつていいのだろうか、と思うようなお姿だったんです。とても痩せていらしたんです。そして、先生、こうおっしゃるんです。「ああ、今日は、何年ぶりで喋ったんやろ!」「今度来た時は、日本語を忘れているかもしれないよ」とか、死の話もされるんですね。「いつか、帰る道を忘れて、ぼくは、どこかで死んでしまうんだ」とかね。誰も知らないところで死んでしまうんだ、とか死の話ばかりされるんですね。

先生の周囲への配慮をしながら、私たち、先生が、お困りにならない方法でお力になりたいとみんなで相談して、できるだけ、自然な形で、食べ物や着替えを持って先生のところに通ったんです。

大学院で老人医療を学ぶ

榎 谷

先生を見ているうちに、私の中では、老齢に伴う問題に関心がどんどん強くなっていて、あまりにも、そのことに自分がのめり込んで行くのに気づいて、ああ、これがこれからの私の勉強のテー

まだと思ったんです。そして、さつきお話しした大学院の精神神経科で研究するようになったんです。これが私のライフワークだと思います。無縁社会の中で、歳をとって行く人たちにどんな風にお役に立てるのかな、ということなんです。

大学院修了時に発表した、高齢者の生き甲斐についての学位論文は、国際医学雑誌に投稿しましたので、世界中からメールがいっぱい届くんなんです。女性の精神的なこととか、老年のこととか、海外での発表の誘いを受けることもあるんですが、歯科医としての診療と、論文を書いたり研究したり、ということは、なかなか両立しなくて、まだ果たせないままです。贅沢な悩みかもしれませんが、両方ともうまくいけばいいんですが、なかなかそれができなくて、とっても悩んでいるんです。

司会

博士論文のテーマは、高齢者の生き甲斐について、ということだったようですが、論文を書くための資料はどうやって集められたんですか？

榎谷

歌劇団時代の上級生に協力していただきました。百二十三人の上級生がアンケートに答えてくださったんです。百人以上の一般の女性の方々にも協力をお願いしました。両方から、まず六〇人余りを抽出して、その方々に、嚙む力と認知機能との関係はどうかということ、聖マリアンナ医科大学の長谷川先生が考案された長谷川式もあります。今回はMMSEで認知機能を測定し、その他、心理検査や、鬱になりやすい傾向があるかどうかなど、嚙む力も含めて検査を受けていただきました。

その中から今度は両方合わせて二〇名以上の方に神戸大学に来ていただいて、MRI検査を受けていただきました。脳の海馬容積を計らせていただいたんです。平均年齢は、どちらも八〇歳です。

*MMSE・・・Mini Mental State Examinationの略。

認知症の評価テストのひとつ。

*海馬・・・大脳の一部。記憶や学習の能力に関係していると言われている。

結果的には、歌劇団出身の女性のほうが海馬容積が大きくて、認知機能も高く、鬱にはなりにくいという数値が出たんです。それを論文にしました。

何故、差が生まれるのかということですが、宝塚歌劇団出身といっても、昭和初期から大正世代の方ですから、退団後は、家庭を持って普通の主婦の暮らしをされています。一般の家庭の主婦と変わらない生活を、そのあとずっと続けていらっしゃる方が殆んどです。

一般の女性と違うのは、歌劇団のメンバーとして、舞台に立っていたということだけなんです。ただ、さっき言ったように、舞台は厳しいところですから、バレエの振り付けでも一回で覚えないと、二回も三回も親切に教えてくれる振付師はいないんです。覚えるまで教えてくれるほど甘くない環境の中で、そして上下関係の厳しい中で、みんな何年か過ごすわけです。

入学前の受験準備期間から、宝塚音楽学校に入学して、歌劇団の舞台に立って、一〇年あるいはそれ以上長く、こうした生活を続けていると、毎日の芸術活動が困難を乗り越える苦しさから楽し

さが生まれる事を、脳が記憶しているのかもしれない。「宝塚」独特の舞台での活動が長かった人が、一般女性よりも、統計学的に優位に差が認められた、という結果になりました。

これを論文にしましたが、結構反応が大きくて、メディアでも取り上げてくれました。

司会 老人の、いわば「こころ」の問題は、赤尾さんの病院の範疇でもありますね。

「若い」とどう向き合うか

赤尾

この問題は、非常に難しく、今の医学がそこに入ってきたのは、ここ十年か十五年だと思っんです。特に、認知症と言われているもののなかに、例えば、レビー小体型が見つかったり、アルツハイマーはアルツハイマーの領域があるし、レビーが、アルツハイマーの外なのか内なのかという議論も理論的には出てくるでしょうね。

*レビー小体型（認知症）・・・認知症の一つだが、アルツハイマーとは区別されている。

ただ、その理論と実践がどこまでマッチングするかということ、先生方の臨床と理論と合わせ、それを広く世の中に発表していただくのが一番いいのかなと思います。

我々は、日一日と歳を重ねていくわけですけど、その中で、医学の進歩を待ち焦がれている人は沢山おられますし、榎谷先生のように、臨床を大事にされながら診療にあたっておられる先生方

が、理論のみならず、臨床の発表の位置づけと言いますか、もう少し、それが高まって行くといいなと思います。

その中に、先ほどの話にもあったように、いずれ自分の命の限界が見えてくる。その年齢に達した時に、人間の心理状況がどう変わっていくのか、とか、自分に対する自信や不安といったものが、どう交錯していくのか。そうしたことが、これから、もう少し幅広く理解していただけるようになる、限界の時を不安に思っている人も、自分の人生をもう少し大事にした方がいいんだと思えるように変わってくるでしょうし、世の中も、そういう人を大切にすると、ということになるとありがたい。

榎谷

私も申し上げたいのはそのことです。

人間が生まれてくるということは、すごいことだと思えますね。私は、自分が子供の時、すごい虚弱体質でして、小学校の低学年の時には、いつも通信簿に、虚弱体質、内向性、と書かれていたんです。そのことで私の母にはすごく苦労をかけた、というか困らせていたんです。母はいつも、人間として生まれて来るといことは、すごいことなのよ、と言っていました。ただ、母は、私が無事に大きくなってくれれば、それでいいと思って育ててくれたんでしょうね。

その励まし方は、まったく根拠のないことなんですけども、子供には分かりやすいんです。たとえば、今度生まれる時には、牛とか馬に生まれるかもしれない、人間として生まれるのは何万年先かもしれない。人間として生まれてきた今、精一杯生きなさい、と言って、私を一生懸命、勇気づ

けてくれていたんだと思うんです。これは、子供心にも信じていました。今度生まれるときに、牛になつてはイヤだから、今、一生懸命頑張らなければ、と母の言ったことを信じてました。

支え合うことの大切さを

赤尾

生まれる前の世界と死後の世界というのは、我々には解らない世界です。存在しているかどうかも解らない。しかし、今、ここに現実には生きているということは認識できるんです。なおかつ、個人個人が認識できますから、そのなかで、今先生がおっしゃったように、自分を大切にすることは、まわりの方も大切にするという精神が、そこには宿っているんだらうと思います。

ですから、自分の肉体を健康に維持することによつて、精神も健康的になり、その精神が他の方々にも、上手に、伝わって行けば、みなさんが幸せになるんじゃないかと思うんです。

榎谷

本当に、たくさんの方に支えてもらつて、今の私もいる、と思うんですね。だから、私も、口はばつたような言い方なんです、人を支えられるようなことができたらいいなと思うんです。

赤尾

ところで、先生のお仕事について考えると、顔の回りの施術というのは、施術される側から言う、と、いちばん恐怖心が湧くところでしょうね。

榎谷

口の中の注射は痛いから、怒られることもあります。だから、麻酔の時も、患者さんに、注射していいですかと相談しながら、やることもあるんですよ。

赤尾 敏感なところですから。その時に初めて、自分が生きているのだということを感じるものですか

ら、痛いか不安にさせないでくれとか、という言葉が出てくるのかもかもしれませんね。

司会 もう一度、「宝塚」の話に戻りますけど、「宝塚」にいらした七年間というのは、まさに凝縮され、充実された時間を、そこで過ごされたわけですね。

榎谷 命をかけていました。

司会 その「宝塚」で得たものは、今考えると、結局、何だったとお思いですか？

「宝塚」で得たこと

榎谷 人間の可能性の素晴らしさを教えてもらいました。人間は、やればできるといことです。歌劇

団在籍中に、ニューヨークから来日したダンスグループのステージを見たとき、若くて、きれいな方たちは、大勢いるんですけど、一人、身体はそんなに大きくなくて、手足も短いんですが、いったん踊り出したら、もうその人の踊りに、目はくぎ付けになるといダンサーがいました。

それって、やっぱり人間の可能性の素晴らしさだと思えます。素晴らしいダンスに感動しました。見ているうちに、これが、人間の素晴らしさなんだと思いました。このときは、才能じゃなくて大事なのは努力だ！ と思いましたね。

才能を否定するんじゃないけど、可能性の素晴らしさというのは、努力が生み出すのだ、という

こと。これを、私は、「宝塚」で教えてもらったと思っています。

毎日、洗脳されるんですよ、やればできるんだって。できないのは、あなたがやらないからだって。どの先生にも、同じことをいつも繰り返し言われると、みんな一生懸命になって、足も拳がるようになるし、声の出し方も違ってくるし、音域も、最初は出なかつた高い声が出るようになるんです。人間の持つている潜在的な力というのは、すごいんですね。

すごいことですよ。人間が本当に、命をかけたらすごいことができると思います。それを、身をもって知ったことが「宝塚」で得たことなんです。だから、今は、「宝塚」に入つて良かったと思っていますよ、泣きましたけどね。毎晩、泣いてましたけど……。全然、後悔はしてません。

「宝塚」があつたから、今がある？

それは言えますね。苦労はしましたけどね。中学の時には、勉強がしたいと思つていましたから、「宝塚」をもし選んでいなければ、そんなに苦勞しないで大学に行つていたかもしれませんが、やっぱり「宝塚」を選んで、結果的には良かったんだと思つています。

もし、「宝塚」に入つていなければ、当然、別の人生を歩んでいたんでしょうが、とすると、今、榎谷さんは何をしていたらっしゃるとご自分では思われますか？

え？「宝塚」に入つていなかったらですか？「宝塚」に入つていなかったら？・・・普通の大
学に入つて、普通の生活をしているでしょうねえ。普通の女性の生活をしているんじゃないかと思
います。

司 会

歯科大学に入る時にも、さらにまた、別の勉強を志して大学院に入る時にも、年齢的なハンディキャップもありましたでしょうし、特に大学院の場合は、診療をしながらでしたでしょうから、大変だったと思うんですが、どうやって乗り越えてこられたんですか？

榎 谷

それはもう、大変でした。大学に入った時には、三十六歳ですからね。同じ学年の、つまり同級生は私の歳のちょうど半分。一〇代の人たちは、国家試験の時もそうなんです。理由は分からなくても、勘で問題を解けるんですね。どうして答えがこれになるの？と聞いても、勘で解けるんですね、と言ってますね。でも、こういう考え方もあるんじゃないの、などと考え始めたら、ダメなんです。何百という問題が出て、それをぱっと、それこそ勘で解けるようにならなければ、合格できません。若い人たちはそれができるんです。

大学の入学も苦労しましたが、国家試験を通るのも簡単には行きませんでした。ハンディキャップがやはりあったんですね。忘れるんですよ。入学試験の時にも、昨日解いた問題なのに、次の日もう、忘れてるんです。ですから、若い人たちの五倍くらい、勉強したと思います。寝ないこともありました。

司 会

そして、大学院の場合には、片方で診療をしながら、入学試験のための勉強をしなければならなかったわけですね。

診療と大学院での学びと

榊 谷

勉強の時間は、診療が始まる前、朝でした。これは変な自慢なんですけど、さあ、今から勉強しようと思うと、すぐ、受験態勢になれるんです。その時期には、生活習慣の中に受験が組み込まれていて、暗記ものは朝起きてやる、お昼休みには、英語論文の速読に挑戦するんです。パソコンの画面を使って「ネイチャー」などを読む練習をしました。夜は夜で、また別のことをするという風に、生活習慣の中に受験を取り込んでいけたんです。

* 「ネイチャー」・・・イギリスで創刊された総合科学雑誌。世界で最も権威ある学術誌のひとつと言われる。

司 会

「宝塚」から歯科医へ、そして今度は、老人の心の問題に関心が移っていく、ということなんです。傍から見えておきますと、あまり、つながりはないように見えるんですが、先ほどおっしゃっていたように、榊谷さんのなかでは、何か人の役に立つようなことをしたい、という気持ちがいっぱいあった。そこからみれば、みんな必然だった、ということなんですか？

私の中では全部つながっているのです

榎谷 全部、つながっています。まったく別のことをやっているわけではないんです。だから、よく言

われるような転身というのは、ちよつと違うな、と自分では思っているんです。その都度、節目、節目で、悩みはしましたけど、つながっていくんです。

司会 その悩み、というのは、具体的にはどういうことだったんですか？

榎谷 人のお役に立ちたい。何ができるのか、と考えるのは、ちよつと恥ずかしいことではあるんですが、同時に、自分自身も成長したい、という思いがそこにはあるんですね。自分を高めていきたい、自分の夢を実現させたい、という思いは、決して、人のためばかりではありません。

司会 私もそう思うんです。自分を高めていきたい、という気持ちは誰にもあつて、それは精一杯、自分を表現したいということでもあると思うんです。そのことが、その過程で、あるいは結果的に、人の役に立つということにもつながって行く、ということがあるんじゃないでしょうか？

おっしゃるように、榎谷さんは確かに自分を大事にして、そして「宝塚」でも、歯科医としても、老人への思いやりにしても、そういうかたちで自分を表現していらっしゃるのではないのかなと思えます。

榎谷 人のために何かをする、ということは、自分にそれだけの力がなければできませんでしょ。だか

ら、自分の中に力を蓄えなければ、人のために、なんてできないじゃないですか。生まれてきて自分だけで生きている人なんていないでしょ。お互いに支え合っているんですからねえ。だから、自分の中の力も蓄え、そして人のお役に立つことができれば、自分は最高に幸せだと思っんですけどね。

赤尾

やはり自分に対してプライドを持てる人、エゴイステックでないプライドを持てる人間が、自己研鑽をすればするほど、結果として、回りまで幸せになつて行く、こういう話だと思います。その中に、先ほどお話があつたように、年齢を重ねれば重ねるほど、そういう気持ちが強くなつていく、ということだと思っんです。

榎谷

若い時よりも今の方が、精神的に落ち着いているような気がします。若い時には、どつちを向いていいか分からなくて、悩んでばかりいました。今は、ライフワークが見つかったということ、心が少し落ち着いているんです。論文を書いたり研究したりする時間ももう少しあれば、という悩みはありますけれど、ともかくライフワークが見つかったというのは大きいです。

赤尾

最後は、人の命が、どういうところに行きつくか、ということになると思っんです。先生のお話のように、今、老人のこのころの内はどうなっていくのか、精神的にもどうなるのか、ということ。その延長線上にいのちの尊厳ということがあつて、そこが高められていく必要があるということなんですよ。

榎谷

老いることによつて人間の尊厳とか、その方のプライドとか、それが剥ぎ取られていくことは、

間違っていると思うんです。

私が、大学院に入ろうと思うきっかけになった先生を見ていて、これは絶対、間違っていると思いました。ほんとに、頭のいい方だったんです。それが、ただ物忘れがあるというだけで、理不尽な扱いをされたり、悔しい思いをさせられたりしたんだろうな、と思うと、そのことが私には、すごいショックだったんです。

司会 そうした理不尽な扱いをされないようにするために、回りに何かできることってありますか。榎谷さんはどうなさろうとしていらつしやるんですか？

榎谷 人間としての誇りを、元に戻してほしいです。

司会 そのために、何が、いま必要だと思っていraftしやいますか？

榎谷 どうしたらいいんですか？ どういう風にしたらいいいんですか？ メディアでも連日のように、取り上げられている問題なんですけど、こういうことをしたら、という方法論はないんですね。どうしたらいいんでしょう？

老いていく人がプライドを持てる社会をこそ

赤尾 簡単にいえば、無視をしないということでしょう。意識をするということ。意識を持ち続けるこ

とによって、無視されている部分が少なくなっていくと思います。有意識、意識があるという状態

を広げていけば、誰でも手を差し伸べられる。そういう状況になって行くと思うんです。そこにはやはり、日本人としての精神的な尊さ、そういったものが高められれば、徐々に、法律はどうあろうとも、人間性を高めるといふことにつながり、非常に重要になると思うんです。先生のお話を聞いていると、狙いはその辺にあるんじゃないかという気がします。

榎谷

そうなんです、もう、そのことばかり考えています。老いて行く人の人間的なプライドとか、尊厳を奪い、剥ぎ取るようなことがないようにするには、どうすればいいのだということを、ずっと考えているんです。

赤尾

無視をしない社会を作る。お互いがそこに存在していることがお互いに分かる、そんな社会を組み立てていくことが、非常に重要になってくる。そこで初めて、人間らしさとか人間のいのちの大切さということが、醸し出されて来るのかな、という気がいたします。お話を聞いていると、先生はその方向に強い意識を持っていらっしやるようですね。

榎谷

関心は、いま、そっちにばかり行ってます。

大学に入った時にですね、なぜ、精神神経科を選んだのですかと、聞かれたときに、実はこういうことがありました、と答えましたら、それは特殊な症例でしょうという人がいたんですね。

確かに、認知症の場合、家族の会などがあって、本人も病院で治療を受けることができる、そうした例はいくらでもあるんです。私も大学で、家族に連れられて病院にやってくる患者さんと何人もお会いしましたし、ほんとに、やさしいご家族に恵まれてお幸せだなあと思ったこともずいぶん

ありました。物忘れがひどくなった父親を心配して、娘さんが付き添って大学病院に來られた姿なども見えています。

でも、誰からも無視されて、相談に行くこともできないような人たちも、一杯おられると思うんですよ。

ほったらかしにされている人たちは、どうなるんですか。何か方法はあるんですか？

大事なのは無視をしないことです

赤尾

先ほど言いましたように、無視しない、意識をすることというのが、実現されなければならないわけです。

孤独死のように、まさに気がついてもらえないまま、お亡くなりになる方の例が後を絶たないということ、これは日本の社会の歪なんです。社会を作り上げていく歪の一部、その歪をどう無くしていくか、それはもう、人間の知恵と努力でしょう。

意識を持っている人たちが、より多く出て来なければなりませんし、関心を持ち過ぎるのもよくないのですが。ともかく、無関心ではダメで、少しだけ関心を持ちましょう、という活動が必要になってくるんでしょうね。

司会

老いの問題というのは、多面的というか、一つは医療面からのアプローチの仕方がありますよね。

赤尾

ただ、人が老いていくというのは避けられないことです。これには限界がある。現状は、榎谷さんの言われるように、ほったらかしにされている人が多いということであれば、無視をしないことが出発点なのだということは、その通りかもしれません。ただ、いま現在の問題をどうするかというのですから、そうすると、制度や、仕組みとして、ほったらかしの状態を作りださない、ということが必要なんじゃないでしょうか？

国民皆保険制度、ということも考えますと、仮に、今まで眼中になかったそういうお年寄りを意識の世界に持つて来て、皆保険制度の中で、医療を提供するとすると、そこに必ず、お金の問題が出てくるんです。

そうすると、もうこれ以上、お金はかけられないということも出て来ます。医療機関によってはね。医療行為はここまでにして頂けないでしょうか、というシステムを作り上げたのは、同じ人間なんです。ですから、人間性を無視しないようなシステムをもう一つ、人間の知恵として作らなければならぬ、ということでしょう。国民皆保険制度は非常にいい制度です。が、必要な見届けができないようなら、新しいシステムを作ることによって、少し関心を示しながらでも、その人がほんとの意味で、人生を全うできるようなシチュエーションを、国内で作って行くことでしょうね。

人間性を無視しないシステムを

榎谷

最後に、自分の人生を否定するんじゃないやなくて、一生懸命、頑張った、良かったって思えるような最後の人生を迎えられることが理想ですものね。今はもう、このことが最大の関心事なんです。頭の中はそれで一杯なのです。

赤尾

大賛成です。これだけ豊かになった日本に、豊かではない部分が残っている。その豊かではないところを、もう少し改善していくことが必要なんでしょう。

榎谷

ところで、「包括支援センター」という組織が地域にはあるんですが。

赤尾

基本的には各自治体がやっているんですが、予算の問題になってきますから、都道府県によって、差が出て来るといふことはあるんでしょう。

これも制度の問題ですが、これをいい方向に持っていけるような、いわゆる社会保障制度の中で、具体的な問題として、健常者の気づかない部分をどうするか、といったようなことをもつと議論をすべきでしょうね。

包括支援と言っても、だから、何を包括しようというのか。支援ということがいいのか、医療制度の中でそういうことが確実にできるような仕組みを作るならば、本来は国民皆保険制度の中の医療サービスを高度化させて、そちらにシフトさせた方が全体的に、バランスは取れると思います。

司会

それにしても、やり甲斐のありそうな、大きなライフワークですね。

榎谷

でも、どんなことをやったらいいのか、分からなくて悩んでいるんですよ。

赤尾

先生のパッション、情熱をたくさん注ぐことよって、先生に協力される方も増えて来るのではないのでしょうか。

榎谷

うちの患者さんの中には、ご高齢の方も多くて、三か月に一回、定期健診をしているんですけど、一月に検診に来られた時、また、今度は四月にお会いしましょうね、と言って約束をしました。その方は八〇歳台半ばで、ひとり暮しで、身寄りもないんです。一月の時はお元気だったんです。ところが、四月になっても来られないものですから、お電話しても出なかつたり、お手紙を出したりもしたんですが、結局、お返事がなかつたんです。この間のクリスマスの際にもカードやチョコレートをお贈りして、待っていたんですが、これにもお返事がなかつたんです。

ほんとに、細いタコの糸が、いつプツンと切れてしまうか分からない、という方がたくさんおられます。

司会

これから益々、高齢社会になって行つて、同じようなケースがいっぱい出て来るんじゃないかと思えますね。それを何とかしなければ、ということをやライフワークとして、ご自分に課したわけですから、大変なお仕事だと思うんですが、それにしても、榎谷さんは、「宝塚」から始まって、歯医者さん、そしていま、老人の医療問題に取り組もうとしていらっしゃるわけですね。

それぞれ、ひとつひとつを生きて行くだけでも大変なことだと思うんですが、榎谷さんのおやり

になっっていることは、二人分、三人分を一身に背負っているという感じですね。

榊谷 そんなことないですよ！ 何をするにも時間がかかるんですから。

赤尾 ストレスを作らない、できるだけ自然な私たちで、あるがままに物事を進められて来ているという感じがするんですね。自分に対してもストレスを持たない方法を、先生はご存知のようで、お母様がそう言われたのも、そうだろうと……。

我々のところで医療を施す場合にも、ストレスのないようにするということは、非常に大事な要素なんです。ストレス社会ですから、ストレスなく、できるだけ自然なままに生きて行けるような、そういう社会を作って行かなくては、と思います。

榊谷 ストレスと言えば、歯の治療の時も、あの機械の音は結構ストレスになりそうですから、何とかしませんとね。あの音を音楽に変えたり、子供の患者さんの時はこの音楽にしましょうとかね。

司会 先生ぜひ、そういう機械を開発してください。

榊谷 わー！私、機械に弱いんですよ。機械音痴なんですよ。

司会 老人の、このころの問題という、最大のライフワークを見つけられたということですが、もう今は、他に何かやりたいということはないのですか？

私のライフワークは今、始まったところです

榎谷 老年精神医学というのは、本当に奥が深いんです。今やっと入り口に立てたところなんです。

これからがスタートなんです。

司会 今、真っ先に取りかかりたいことは何ですか？

榎谷 今はただ、自分の周囲の方々に、たとえば、お手紙を出したり、心が和むようなものをお贈りしたり、というような交流ぐらいです。急がなければいけないんですけど、今、わたしにできることは、そのくらいですね。お手紙のやり取りをしたり、励ましのものをお贈りしたりと、私のできる範囲で、個人的にやっているところです。

でも、こうしたことがどんどん、広がって行くことも大事なことじゃないかなと思っていますので。

「了」

あとがき

人としての魅力を秘めているという印象が強い。自分自身の生き様を、自分が求める心のうちを、そのまま具現化し、且つ成功へと導いているこの力強さは、初対面での引っ込み思案の様な印象からは程遠く感じられる。

最初の項にある虞美人草に例えるならば、宝塚時代は萌えるような紅色、歯科医師は桃色のようやさしさ、そして老人医療は白色のように無へのチャレンジでしょう。

最後はどのような色を見せてもらえるのか？ たぶん絞り（紅色、桃色、白色の交じった色）のような、四弁の花を咲かせていただけそうな、大いに期待が持てるすばらしいお人であり、対談でした。

赤尾保志

【ゲスト】榎谷多紀子

ますたに・たきこ



1945年 大阪生まれ

1964年 宝塚音楽学校入学

1966年 宝塚歌劇団に首席で入団

1969年 年度賞新人賞を受賞

1970年 宝塚歌劇団 退団

NHK河ドラマ、民放ドラマ、舞台などに出演

1982年 大阪歯科大学入学

1993年 ますたにデンタルクリニック開業

2006年 神戸大学大学院精神神経科入学

2010年 神戸大学大学院精神神経科修了 医学博士号取得

士号取得

【司会】草柳隆二 くさやなぎ・りゅうぞう



1937年 神奈川県生まれ。
1961年 NHK入局。「新日本紀行」などのナレーション番組、教育テレビ「こころの時代」などインタビュ番組を担当。
1994年 定年退職後は、フリーアナウンサーとして、言葉に関する講座や、研修業務に従事。

著者略歴

赤尾保志

あかお やすし



1943年、川崎市生まれ。
1968年、慶応義塾大学卒業 東芝機械(株)入社
1978年、財団法人聖マリアンナ会 評議員
オリックス・レンテックを経て(株)トライアックス設立
2003年、財団法人聖マリアンナ会理事
2005年、同会理事長

の 五 つ ち な

赤尾保志 対談シリーズ

9